

猪10 猪に遇った話 = = = 猪・鹿・狸より

猪が人が近づいたのも知らずに、大甎で寝ていた話はよく耳にすることである。七、八年前、アケビを取りに行き、猪に遇ったと言う女から、当時の状況を聞いたことがあった。山国とは言っても、狩人以外で猪を目の当たりに見たものは、至って少なかったのである。村のジベットの山は、深い窪で底に沢が一筋流れていた。その沢を跨いで茂ったボローの一つに、アケビが鈴生りに下がっていたそうである。女は萱を押し分けて近づいて、今一息でその下に出られると思って、ひょいと前を見ると、萱の葉がおそろしく寝た真ん中に、真っ黒い獣が寝ていた。はっと思ったとき、ごろごろと猫のような甎が聞こえたそうである。どんな恰好で、どんなふうになら寝ていたかも、いっさい夢中で遁げて来たと言うた。アケビの方へ目を奪われて、傍らへ行くまで気がつかないだけに、驚き方も劇しかったのである。それにしても、紫色に熟れたアケビと、枯萱の中に眠る猪の対照は、思いがけぬ絵であった。その上アケビの枝にいろいろの鳥の群れを配したなら、一段美しい画面が展けたらと思う。

絵にはならななんだが、次の話も数尺の距離から猪を観察した、耳新しい実見話である。

村の某の男であった。鳳来寺村分垂（ぶんだれ）の山中で、一人炭を焼いていると、午過ぎ頃とも思う時分、何やら近くの齒朶（しだ）を押し分けて山を降って来るものがあった。木間からそっと透かして見ると、今しも一頭の巨猪が、静かに炭籠の方へ近づきつつあったと言う。とっさのことで、遁げる間も隠れる隙もない。飛びかかったらそれまで、力の限り撲ろうと肝を据えて、炭木をかたく握っていたそうである。しかし猪は男を見ても格別驚いた様子もなく静かに炭籠の傍らを通り抜けて、下に向けて降りて行ったと言う。事實はただこれだけであったが、某の説明によると、その猪が劫を経た恐ろしい古猪だった。毛並みは灰色がほとんど白くなって、背から胸へかけて、松脂でも塗っているらしく、さわっては見ななんだが、かちかちとまるで岩を被ったようであったと言う。何だか講談に出て来る狒々（ひひ）のようで、にわかに信じ難い気もされるが、実見者はかたく信じて疑わななんだ。猪が松脂を塗る話は他にもある。しかもこの話には、その猪をただものでなくするに充分な傍証も絡んでいた。数日前からそちこちの山で、幾組もの狩人を悩まして、弾丸も三つ四つ喰っていないながら、どうしても捕ることが出来ぬ出没自在の古猪があった。多くの点がそれに符号していたのである。

その後その猪は如何にしたか、消息はついに聞ななんだが、おそらく撃たれたにしても、ただの殺され方はしなななただろう。一方、話の方は、実見者が平素無口な実直者だっただけ、そのまま信じられて、次第に松脂のような箔をつ

けて、永く語り伝えられるであろう。

山深い土地に住んで、猪とは絶えず交渉のあった人たちでも、冷静な態度で観察していた者は至って少なかった。自然のままの存在には、昇がれて行く骸などとはちがって、威厳と言うのかとにかく犯し難いあるものを備えていたことは事実である。そのためか多くは見た目以上に語ろうとした点もあったろうと思う。狩人の多くがすでにそうであった。